

和田教授を偲ぶ

和田先生が不治の病で入院されたことは、ウィーンで知った。60年3月末で定年退職されることになり、工学部の永松教授とご一緒の“送る会”を3月20日にホテル・ニューオータニで催した際には、年をとられたなあとは感じたが、とても亡くなられるような気配はうかがえなかった。これからも非常勤講師として学生達と一緒に活動し、長年続けられた研究も続けたいと言っておられた。それがわずか8カ月後の12月2日に逝去された。

私は、昭和24年新制大学発足時から机を共にし、常に隣りに居られたので、その人柄、教育・研究への熱意、そしてその温かさをしたって集ってくる学生やOB達の情を肌で感じていた。9月、奥様が医師から、あと2カ月の余命と告げられた旨の連絡を受けたとき、一瞬目の前が暗くなったような気がした。とても信じられない、というのがその時の気持であった。病とはいえ、あれだけ元気で誰よりも健康に気をつかい、そのために努力された先生が、全く突然にとしか言いようのない最期をとげられたことに、腹立たしさを覚えるだけである。

和田先生は温厚・真面目、しかも芯の太い人であった。研究テーマをきめられると、コツコツ時間をかけて資料を集め、それを丁寧に整理されてから論文にまとめられるタイプであった。“夜間部学生の生活実態調査”を手がけられたことがあったが、その緻密な調査方法は、その後大学当局がその方式で調査を始めたことから、一人の力としては大変な努力をされておられたことがわかる。また、先生のライフ・ワークとなった“我が国の中小都市における社会体育の実態”研究は、本来ならば政府がやるべき調査を、学生やOBの協力は得たが、殆ど一人で8年間にわたる資料収集を全国規模でやられた成果であ

って、小さな研究テーマだけに取組んでいる私にとっては、ただ驚きであった。

学生と一緒に居られることが好きで、教員室に訪ねて来る学生が多かったし、面倒見がよく、ゼミ合宿が発展して他大学の女子学生も多く参加するようになり、その中に恋が芽生えて卒業後結ばれたカップルの媒妁人を何組かされておられたようである。告別式の際、ひきもきらぬ参列者の中に、多くの若い人達の姿があったのは、先生の人柄が、これらの人々に受け継がれているものと思われ、急逝されたことの残念さがこみあげてくる気がした。先生のご冥福を祈るのみである。（1月30日、佐藤 隆）